

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.278

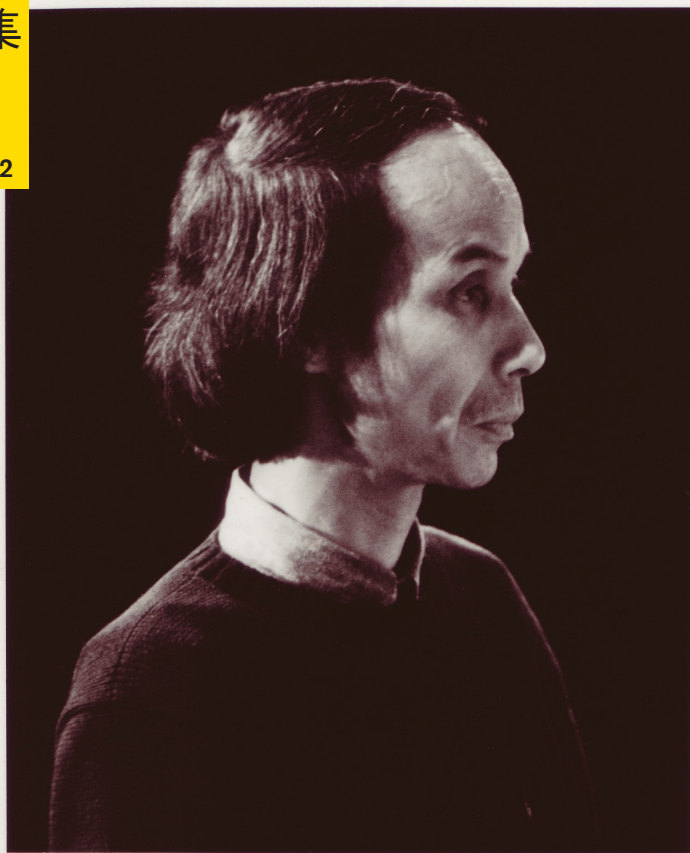
9

September 2026

特集

02

— 歌に始まり歌に終わる武満徹の道の断面 —
《ノヴェンバー・ステップス》から《秋庭歌一具》へ



Toru Takemitsu

©Schott Music Co. Ltd., Tokyo

- 06 今昔雅楽集 四、秋庭歌一具
- 07 講座 片山館長と「めぐる」シリーズ
- 08 ちょっとお昼にクラシック 塚谷水無子
- 10 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

《ノヴェンバー・ステップス》から《秋庭歌一具》へ —歌に始まり歌に終わる武満徹の道の断面—

文：片山杜秀（音楽評論・水戸芸術館館長）



《ノヴェンバー・ステップス》。武満徹の名を世界に広めた。琵琶と尺八とオーケストラのための一種のコンチェルト。全11楽章。イレヴン・ムーヴメンツ。でも題名は「11月の階段」。詩人だ。武満の音にも言葉にも溢れているのはポエジーだ。ベートーヴェンやマーラーやブルックナーと同じ作曲家でも長編小説家だ。理屈や説明や念押しに走ってくだくなる。そもそもソナタ形式がそういうものだ。が、ドビュッシーやウェーベルンだと、詩人か、短編小説家か。武満は多分に後者。そこに魅力の肝がある。しかもその魅力はいつまでも色褪せない。本物ということだ。さらに「ステップス」が日本の伝統楽器を用いる曲のタイトルとしても嵌っている。箏なら八橋検校の《六段の調》と

か。人形浄瑠璃なら「勘平腹切」は『仮名手本忠臣蔵』の六段目だとか。段、つまりステップで、曲や幕を数える。琵琶や尺八は「ステップス」と相性がよい。

はて、《ノヴェンバー・ステップス》はいつどこで初演されたのか。1967年、小澤征爾の指揮するニューヨーク・フィルハーモニックによってリンカーン・センターで。ソリストは琵琶が鶴田錦史で尺八が横山勝也。1967年に意味があった。ニューヨーク・フィルハーモニックは1842年の創設。ショパンやメンデルスゾーンやシューマンの活躍していた時代だ。1967年には創立125周年。そのとき同団を率いていたのはレナード・バーンスタイン。125周年記念の新作の委嘱を内外に約20曲も行った。

新作委嘱は「オーケストラの華」。多ければ多い程よし。今日ではかなり廃れた考え方かもしれないが。バーンスタインは米国と関係の深い日本に1枠と思った。彼の念頭にあったのは黛敏郎。バーンスタインは黛のなかなかシンフォニック・ジャズ的な《饗宴》(1954年)をニューヨーク・フィルハーモニックと演奏していたし、同団の1961年の初来日公演では《饗宴》がバーンスタインの副指揮者として帯同していた小澤の棒で披露された。やはり黛が良いか。

そこで留め男が入った。小澤である。武満を推薦した。武満は黛よりも1つ年下。でも名の出るまで少し時間がかかった。若き日には黛から援助を受けたこともある。しかしついには日本での武満の評価はうなぎのぼ

りに。切れ味鋭い評論家、吉田秀和も絶賛。小澤も既に日本で武満を指揮していた。バーンスタインは説得された。

それにしても独奏楽器が琵琶と尺八とは！日本人も驚いた。三味線や箏ならオーケストラとの協奏的楽曲は1920年代から作られていた。箏の世界の大スター、宮城道雄が西洋管弦楽との共演に積極的だったせいもある。しかし尺八や琵琶となると、もちろん国民的には親しまれていた楽器だったが、日本の西洋クラシック音楽の世界からは縁遠かった。西洋音楽は伝統的にハーモニーを重視するから、音程の良く揃う楽器でないとうまくない。伝統的な旋律や和声を否定するシェーンベルク以降の無調音楽が第二次世界大戦後の西側のクラシック音楽で人気を博するようになって、その主流は12音音楽のような半音階の細かな音程差を常に明瞭に意識させ続けようとするタイプだから、ますます音程の精妙な楽器が大切にされる。ところが尺八はどうか。音程の安定しないところに味わいがある。ムラ息のような雑音の効果も大切。箏や三味線に合わせて旋律をしっかりと吹くこともあるけれど、やはり禪宗や虚無僧と結びついてきた楽器だ。尺八音楽の伝統的レパートリーというと『鹿の遠音』や『鶴之巣籠』や『松風』や『打波』や『虚空』や『霧海簾』や『浮雲』や『瀧落』等々。天然自然の茫漠たる音響と相呼応するものがとても多い。つまり音程をきちんとして、和声のハッキリした響き、かたちを定かにする音楽を求める向きには合わない。12音音楽を厳格に追求したい戦後の作曲家たちにも全く合わない。フルートで尺八の音色を模すくらいにしておくのがちょうどよい。尺八はお

呼びでなかった。すると琵琶は？音程は正確に鳴らせる楽器ではあるのだが、音色が特徴的すぎて打楽器の効果に富み過ぎるというか雑味が強過ぎるというか、1音だけで強烈に自己主張してしまうし、日本人の耳には『平家物語』を語る琵琶法師のイメージを連想させ過ぎもする。箏や三味線に比べてもニュートラルには扱いにくい。尺八同様、西洋クラシック音楽の畑からはお呼びがかかりにくい楽器だった。

ところが、昭和で言うと30年代に状況が変わってゆく。クラシック音楽の中でも、西側の前衛音楽、さらに東側でもポーランドの作曲家たちに、不協和な音塊の流動を主たる表現とする傾向が台頭し、これぞ戦後の新しい音楽と多くのファンをひきつけるようになっていった。不明瞭な音の塊が強かったり弱かったりしながら波か風か霧かのようにざわめき続ける音楽。管楽器や弦楽器や管弦楽、あるいは打楽器合奏などで、そういう不定形な響きを流動させてゆく。ギリシアのクセナキスや東側のハンガリーから西側に亡命してきたリゲティやポーランドのペンデレツキが広めていった。それから、米国のジョン・ケージによって推進された偶然性の音楽も！作曲家の美的意思や何らかの法則性に従って音を決めない。占いで音を選んでハッキリと全部の音を五線譜に書いても偶然性の音楽だが、図形楽譜などを用いて、鳴らす音を曖昧模糊・五里霧中のままにしておいて演奏家の創意工夫に委ねてしまうのも、また偶然性の音楽だ。後者の方だと、尺八や琵琶の担っている響きやパフォーマンスのイメージにも近い。クセナキス、リゲティ、ペンデレツキ、ケージ。いずれも伊仏独奥のような音程本位の

西洋音楽の伝統を育ててきた“本場の国々”の作曲家でないところが面白い。日本の出番も来そうなものだ。

実際そうだった。こうした世界の作曲界の地殻変動は日本の前衛的な作曲家たちに好機を与えた。それまでずっと扱い難しと思われてきた伝統遺産の積極的活用が促されたのである。クセナキスやリゲティやペンデレツキ、あるいはケージの追い求める美意識は、要するに日本の伝統に含みこまれるものではないか。禅とか虚無僧尺八とか平家琵琶とか。文明開化以来ずっといつものように、西洋の先端を追いかけていた日本の作曲家は、気が付けばいつの間にか西洋の遥か先に立っていた。まるでSFアニメで宇宙戦艦ヤマトか何か空間を歪ませて瞬間的に遠距離に移動したように。そんなワープのための装置がたとえば琵琶や尺八であった。

具体的にしよう。1962年、武満は小林正樹監督の映画『切腹』の音楽を担当する。尺八を使っているようにも聴こえるがアルト・フルートだ。そして琵琶は本物を使っている。作品は武士の世界の不合理と残虐性をどぎつく描く。刀を突き立てるような瞬間的強度が厳しい画面作りに呼応してサウンドトラックにも求められる。そこで有効なのが西洋近代の合理的で響きのピントの合う楽器よりも不条理で濁りがあって瞬間的にテンションも上げやすい尺八や琵琶なのだ。『切腹』では尺八風の響きはアルト・フルートで代用されるが、1964年の篠田正浩監督の『暗殺』になると、武満は映画音楽のメインの楽器に本物の尺八を用いる。尺八が、打楽器や琵琶や三味線や箏を兼ねて代用するかのようなブリペアド・ピアノ（ピアノの中にいろいろな

詰め物をしてピアノならざる摩訶不思議な響きを鳴らすようにした改造ピアノ)と共演し、幕末の怪傑、清河八郎が暗殺されるまでのドラマに瞬間的テンションをかけ続ける。この『暗殺』で尺八を奏したのは横山勝也。武満との出会いだ。同年に完成した小林正樹監督の『怪談』は小泉八雲原作による全4話のオムニバス。怪奇幻想映画ということもあって音楽や音響の比重がとて高まるが、また小林コンビを組んだ武満の音作りはさらに大胆になる。第2話は「雪女」。そこでの音楽・音響は尺八の多重録音による。吹いているのはやはり横山。尺八だから何だか分からない音色にすっかり変調された風だ。か山のざわめきだからよく分からない音響は血も凍る音圧を画面にかけながら、画面上の岸恵子扮する雪女の世界を凍結させる息と完全に共振する。続く第3話は「耳無芳一の話」。琵琶法師の芳一が平家の亡霊相手に壇ノ浦での平家滅亡の段を弾き語りし、亡霊たちは自分らのいまわの際の話に興奮して魔界は沸騰するのだが、中村賀津雄扮する芳一の琵琶語りを吹き替え、新たに自ら作曲した壇ノ浦のくだりを凄絶に演じるのは鶴田錦史。その鶴田の語りと琵琶の録音が武満の音響操作によって魔界のどよめきと化してゆく圧倒的なさま! 琵琶の一言、尺八の一吹きが敷衍され、増殖して、『怪談』という映画の映像は比類なき迫力を獲得するに至る。同じく1964年には、西洋のこの国におけるシェーンベルクやウェーバーの流儀の12音音楽の推進者とみなされてきた諸井誠が、無伴奏尺八のための独奏組曲《竹籟五章》を書き、翌1965年には武満が琵琶と尺八のための《エクリップス》を、映画音楽で気心も技もよ

く知れた鶴田と横山をあてこんで作り、むろん二人によって初演。その2年後の《ノヴェンバー・ステップス》につながる。その曲でのオーケストラの役割はというと、琵琶や尺八の迫力やくぐもりや鋭利さや苦みや雑味を如何に敷衍するかというところにあるのだろう。「11月の階段」は禅宗かどこかの寺の石段のある庭園の透徹とした晩秋の光景に見合うものなのかもしれない。いずれにせよ、武満は尺八や琵琶の瞬間的ジェスチャーやそこから滲むように澱むように霞むように移ろってゆく不定形な音の流動に懸けて、世界的な大家になった。ナショナルに徹してインターナショナルになった実例と言えるだろう。

そういう武満の音作りはたとえば「一言の構造」と名付けられたこともあった。雑味のたくさん入った尺八や琵琶やそれに類する響きの瞬間的な「内苑」から、その「外苑」を紡いでは、それが夢の茫洋として儚くなると、また「内苑」が……。武満のひとつの時代の作法であろう。では「一言の構造」のような音楽を武満が夢見て実現してゆく始まりはどこであったか。ケージからの刺激か。クセナキスやリゲティからの何らかの影響ゆえか。映画の仕事で時代劇や怪奇映画を担当する中で映画のテーマに導かれつつ尺八や琵琶に深入りしたせいかな。そうとも言えるがもっとはつきりきっかけになる作品があったと思う。1959年に初演された黛敏郎の《涅槃交響曲》である。戦後初期からストラヴィンスキーやジャズやラテン音楽や伊福部昭やガムラン音楽やメシアンやヴァレーズやピエール・シェフェールに刺激されながらエネルギーギッシュな音響をひたすら志向していた黛は、20代後半のうちに身近なところにユートピアの大音響が

鳴っていると気付いた。日本の仏教寺院の大梵鐘である。とてつもなくうるさい。ひとつきが引き延ばされて空間に滲んでいって消えるまでの息の長さ。これまた大したものだ。黛は大管弦楽で大梵鐘の大音響を模そうと試みる。しかしひとつきではやはりすぐ終わってしまう。そこで打ち続けられ交錯する梵鐘の響きの交わりをイメージする。でもそうやっても時間的には自ずと限度があろう。もっと長くするには仏教声明を模したコーラスを足せばよい。そうして出来上がったのが《涅槃交響曲》。「一言の構造」に基づくと呼べるだろう。黛が29歳の年。28歳の年の武満にも衝撃を与えた。武満も鐘の鳴るイメージに依拠した大オーケストラのための音楽が書きたくなった。出来たのは武満の本格的な管弦楽作品として第1作の《ソリテュード・ソノール》。訳せば音の孤独。孤独な音でもよかろう。このタイトルで「一言の構造」を夢見て黛を追走するのだと宣言しているようにも取れる。孤独な響きとは要するに一言だけでも言えるから。この作品は黛に献呈された。初演したのは《涅槃交響曲》と同じく岩城宏之指揮するNHK交響楽団。年も同じく1958年で、《涅槃交響曲》は4月、《ソリテュード・ソノール》は11月。その頃に武満は「一言の響き」を求めて船出したのだと思う。《ソリテュード・ソノール》から《ノヴェンバー・ステップス》に辿り着くまでは9年。なかなか早いと思う。

ならば1958年までの武満は音楽家として何を求めていたのだろうか? 「一言の構造」のような瞬間から波紋や打ち上げ花火のように敷衍される音楽ではなく「歌」であったのではないか。息が短い、長い。とにかく歌。旋律。武満の音楽への目覚めは

戦時下に聴いたシャンソン《聞かせてよ愛の言葉を》であったとはよく知られた挿話だが、シャンソンからではなかなかクラシック音楽の作曲家というところまでは辿り着くまい。もちろん次のステップがあった。フランクのピアノ曲《前奏曲、コラールとフーガ》である。その旋律性に魅せられたのだという。フランクらしい旋律とは順次進行を多用したなだらかなもので、しかも長調・短調にはまらない古風さがあり、特に戦前の日本人の耳には西洋くささから少し離れて聞こえるところもあった。武満の師匠筋の清瀬保二も早坂文雄も、あるいは諸井誠の父の諸井三郎も、みんなフランクに魅せられて作曲にはまっていた。武満も同じ感性を有していたのだ。だから清瀬と早坂に親しめたとも言える。ついでに言うと黛も矢代秋雄も師匠の橋本國彦からフランクの旋律よりも楽式を研究するように指導され、黛も矢代もフランクの循環形式に生涯にわたって呪縛されていたろう。日本作曲史に落ちるフランクの影は色濃くしかも案外と広い。ともかく武満はフランクのように歌い続ける長い曲を書きたかったはずなのだ。でも戦後の日本の新しい作曲家としてその理想をどう達成すればいいのか。試行錯誤を重ねていたのが1958年までの武満と思う。最初期からの彼の歌い方は、清瀬や早坂に倣って日本の五音音階を土台とし、でもそれが赤裸々にならないように、きっかけでありタネとしての五音音階に基づく歌の断片をメシアン「移調の限られたモード」の各種のどれかに溶け込ませて敷衍してわなないて息の短めのうちに儚くなっている。初期武満の旋律作法とはそういうものではないか。この歌をもっと息長くできるか。多分、その企てがあま

り始まらぬうちに「歌の時代」はいったん終わる。《涅槃交響曲》の衝撃をひとつのきっかけに転換する。そこから黛やウェーベルンやブーレーズも咀嚼しながら「一音の構造」の時代でひとつできあがるのだろうが、「一音の構造」にこだわっていると音楽はどうしても時間の多寡にかかわらず構造としては断片化し断章化してしまう。

実はこの悩みは「一音の構造」の先駆者、黛にも共有されていたろう。梵鐘の一撃で極まってしまうと、その先がない。そこで声明の旋律も応用してみる。が、黛の見つけた大きな逃げ道は雅楽であった。《涅槃交響曲》から4年後、黛は《BUGAKU》(1962年)で生き生きと持続性に富んだ雅楽風のバレエ音楽を書くことができた。バレエの初演はニューヨーク。そこから1970年の雅楽そのものの大合奏のための《昭和天平楽》へとつながる。なぜ雅楽が逃げ道になるのか。それは大陸由来の息の長い歌を有していて、その楽器も、琵琶法師の琵琶や尺八のような一音の濁りの多い実存に懸けているのではなく、音律も重んじて旋律や和音のかたちもきちんと鳴らせるように出来上がっている。そこから自由に踏み外して「一音の構造」に大陸そのものや大陸趣味の朝廷と違った日本らしさを求めていったのがそのあとの音楽史になるのだ。梵鐘とも琵琶とも尺八とも違う、「一音」でなく「瞬間」でもなく「多音」で旋律的でハーモニックで持続的な音楽へ戻ろうとするときの一種のリハビリテーション。そこで雅楽の再発見が行われる。黛がそのようにしてそのあとのグランド・オペラへと繋げ、武満がその後を追って言わば「後期武満」の協和的な歌の世界を切り開く。《秋

庭歌》(1973年)と、それを拡大した《秋庭歌一具》(1979年)はその転換点に位置すると思う。

歌を歌いたいと思い、歌よりも「一音の構造」に懸け、初心を忘れられずに歌に帰ってきた。そんな武満伝がありうるのではなかろうか。

■公演情報

武満徹の肖像 ～武満徹没後30年記念企画～

2026.9.26(土)

15:30開場 16:00開演

全席指定

一般¥4,500、U-25(25歳以下)¥1,500

「今昔雅楽集 四、秋庭歌一具」(10/4)公演

とのセット券¥7,000

●出演

波多野睦美(メゾソプラノ)

高木綾子(フルート)

成田達輝(ヴァイオリン)

山澤慧(チェロ)

北村朋幹(ピアノ)

片山杜秀(ナビゲーター)

●曲目

妖精の距離(1951/89):ヴァイオリンとピアノの

ための

エア(1995):フルートのための

翼(1982)[SONGS]

ビトゥーイン・タイズ(1993):ヴァイオリン、チェ

ロ、ピアノのための

ほか

秋の記憶—武満徹の雅楽体験から〈秋庭歌〉へ

今昔雅楽集 四、秋庭歌一具

文：篠田大基



伶楽舎『秋庭歌』の演奏(水戸芸術館、2018年7月7日) ©田澤純



「10月6日 宮内庁にて雅楽を聴く
まさに音がたちのぼるという印象をう
けた。それは、樹のように、天へ向って
起ったのである。」

(武満徹「音、沈黙と洩りあえるほどに」)

1961年の秋、武満徹は宮内庁の
演奏会で初めて雅楽の生演奏に接
し、その印象を日記にこう記した。笙
の切れ目なく伸びる和音。テンポを刻
まない打楽器。武満の耳に雅楽は、日
常の時間とは別次元を流れる音楽と
して響いた。

雅楽の影響は、彼が5年後に完成
した〈地平線のドーリア〉に顕著に表
れる。ノンヴィブラートの弦楽器群
の持続音は笙を、時折打たれるピ
ツィカートは鞆鼓を思わせる、と音楽
評論家の秋山邦晴は指摘した。武満
自身も雅楽を念頭に作曲したことを
認めている。国立劇場演出室の木戸
敏郎(文右衛門)は、この作品を聴い
て武満への新作雅楽の委嘱を決め
たという。それが1973年の雅楽〈秋
庭歌〉に結実した。

〈地平線のドーリア〉の両端部分
は、E♭を主音とするドーリア旋法とそ
の派生音階で作られている。武満は、
「『秋庭歌』は〈地平線のドーリア〉と
完全に同じ素材で書いた」と述べ、木
戸敏郎は〈秋庭歌〉を「まるで〈地平
線のドーリア〉の雅楽ヴァージョン」と

評した。実際、〈秋庭歌〉の冒頭は、
〈地平線のドーリア〉の旋法を半音上
げたEを主音とするドーリア旋法で書か
れている。Eを主音とするドーリア旋法
は、雅楽における唐楽の六調子の一つ、
平調に相当する。この作品の初演
に参加した芝祐靖が指摘したように、
平調は陰陽五行説で秋を象徴し、そ
れはつまり、〈秋庭歌〉の「秋」である。

ここで疑問が生じる。そもそもな
ぜ、武満は〈地平線のドーリア〉にお
いてドーリア旋法を選んだのか。彼はド
リア旋法が「われわれの音楽にとっ
て根源的な意味のあるもの」と語っ
たのみで、詳しくは説明していない。

答えの手がかりとなるのが、武満
が宮内庁で聴いた1961年の雅楽演
奏会である。その曲目は、これまで明
らかではなかった。今回、宮内庁に
問い合わせたところ、以下の曲目で
あったことが判明した。来る10月の
演奏会の第一部は、ここから抜粋し
ている(曲名と調名を示す。下線が
今回の演奏曲)。

管絃：太食調音取、合歡塩(太食調)、
朗詠 嘉辰(平調)、抜頭(太食調)
舞楽：甘州(平調)、右方 還城楽(太
食調)、仁和楽(高麗老越調)

太食調は平調の枝調子(主音が同
じ旋法)であり、高麗楽の高麗老越

調は音階構成としては唐楽の平調と
同じである。つまりこの演奏会は全
体を通してEの主音が通底し、ドー
リア旋法とその類縁旋法で構成され
たのである。武満が宮内庁で体験
したその響きが、〈地平線のドーリ
ア〉に、そして〈秋庭歌〉に、留ま
っていたのではないだろうか。

1961年の秋、武満は宮内庁で雅
楽を聴いた。その記憶は〈地平線の
ドーリア〉を経て〈秋庭歌〉へ、さら
に6年後の〈秋庭歌一具〉へとつなが
っていく。今回の「今昔雅楽集 四」は、
古典雅楽の響きから武満の音楽世
界へと、「秋」の記憶をたどる試みで
ある。演奏会の第一部と第二部は、E
の主音で地続きになっている。古典
から新たな創造へ。受け継がれる音
の地平を、ぜひ体験していただけれ
ば幸いである。

■公演情報

伝統芸能のスミエ[雅楽]

今昔雅楽集 四、秋庭歌一具 ～武満徹没後30年記念企画～

2026.10.4(日)

15:30開場 15:45プレトーク 16:00開演

全席指定 一般¥4,500、

U-25(25歳以下) ¥1,500

「武満徹の肖像」(9/26)公演とのセット券

¥7,000

●出演

伶楽舎(雅楽)、荒木奏美(オーボエ)、
宮田まゆみ(笙)、片山杜秀(ナビゲーター)

●曲目

ディスタンス(武満徹/1972)、秋庭歌一具(武
満徹/1973・79) ほか

知の巨人と歩む芸術の奥深き旅

片山杜秀館長とめぐる物語

文：角増 柊



片山杜秀館長

2024年11月、小澤征爾前館長の後を継ぎ、音楽評論家で政治学者の片山杜秀氏が水戸芸術館第3代館長に就任しました。2026年には長年の音楽批評における功績により紫綬褒章を受章し、さらに著書『大衆必易—わたくしの伊福部昭伝—』が令和6年度芸術選奨文部科学大臣賞(評論部門)に輝くなど、片山館長は現代日本を代表する知の巨人としてその名を馳せています。そんな館長自らが講師を務め、音楽や芸術の深淵を案内する新シリーズ「講座 片山館長と『めぐる』シリーズ」が始動します。記念すべき第1回のテーマは、日本が世界に誇る作曲家で今年没後30年を迎える武満徹氏です。

導かれるべくして結ばれた 片山館長と水戸芸術館の縁

片山館長と当館のつながりは、じつは開館まもない頃にまでさかのぼることができます。館長自身は当時を「まだ学生だった頃にこの館ができ、若い頃からコンスタントに催事に通っていた」と振り返ります。評論家としての道

を歩み始めてからも、当館でコンサートのナビゲーターをたびたび務めるなど、つながり続けています。

大きな転機となったのは2008年、音楽批評の集成である『音盤考現学』『音盤博物誌』の2冊が、第18回吉田秀和賞を受賞したことでした。この受賞を機に、初代館長の吉田秀和氏との親交も深まるとともに、2012年からは同賞の審査委員を務めるなど、当館とのつながりもより濃密なものになっていきました。

また、片山館長は龍ヶ崎市に居を構える茨城県民でもあり、政治学者としての著作『尊皇攘夷—水戸学の四百年』では、県都水戸の独自の郷土思想を深く探究しています。博覧強記の評論家・学者としての視点と、地域に根ざした生活者としての視点—その両方の要素を併せ持つ片山氏が館長に就任したという事実は、当館に刻まれた吉田氏の遺伝子を継承し、発展させ、そして地域社会との結びつきをさらに強固にするための、歴史的な必然であったのかもしれませんが。

没後30年

今こそ語る「武満徹」

講座第1回のテーマに選ばれた武満氏は、吉田秀和賞の創設時に吉田氏らとともに審査委員を務め、当館の歩みにも深く関わりました。没後30年を迎える今年、片山館長は音楽的な視点からのアプローチだけでなく、時代の変遷の中での武満氏の姿を、独自の洞察で紐解いていきます。そして、座学で学んだ後はぜひ、武満氏の音楽に生で触れてみてください。本講座の後には、武満氏の創作の軌跡を辿るとともに氏が望んだ“時間の庭

園”を巡る公演「武満の肖像」や、氏が創り出した“音がたちのぼる”瞬間を再現する公演「今昔雅楽集 四、秋庭歌一具」が予定されています。

門前から奥の院へ

館長が託す水戸芸術館の使命

片山館長はその就任会見において、芸術をお寺や神社の参道に例えながら次のように語りました。「手前の『門前』には多くの人が集まり楽しむ賑わいが必要だけれども、それだけで終わってしまっては不完全です。その先にある、より深く本質的な真理に触れられる『奥の院』まで、いかにお客様のほうから能動的に入ってきていただけるかが肝心なのです。ただ漫然と間口を広くするのではなく、その間口をきっかけとして、いかに深いところまでご一緒できるか。それが水戸芸術館の使命です」。

本講座は、まさにその「奥の院」への旅のガイドとなることでしょう。秋の気配が近づく9月初頭、知的好奇心を刺激する片山館長との「めぐる」旅へ、皆様ぜひお越しください。

■公演情報

講座

片山館長と「めぐる」シリーズ
第1回 武満徹をめぐる
～武満徹没後30年記念企画～

2026.9.5(土)
13:30開場 14:00開演
全席自由 ¥1,000

●出演

片山杜秀(講師/水戸芸術館館長)
大津良夫(司会/水戸市芸術振興財団常務理事)

鍵盤楽器との一期一会

ケンバニスト・塚谷水無子インタビュー

聞き手：篠田大基



「鍵盤」にちなんで自らを「ケンバニスト」と名乗る塚谷水無子さん。バッハの〈ゴルトベルク変奏曲〉のユニークな演奏で話題を呼んでいます。今回の「ちょっとお昼にクラシック」でも、開場時にエントランスホールのパイプオルガンで〈ゴルトベルク変奏曲〉冒頭のアリアを弾いてくださることになりました。塚谷さんがこれまでにリリースした〈ゴルトベルク変奏曲〉のCDはじつに7種類（記録録音も含めるともっとあるらしい）。この大曲を世界で一番多くレコーディングした演奏家かもしれません。そんな塚谷さんに、9月12日のコンサートに向けてお話を伺いました。

塚谷：〈ゴルトベルク変奏曲〉はパイプオルガン、ポジティブオルガン、ピアノ……ピアノも、バッハのオリジナルとブゾーニの編曲版と、2台ピアノ版も弾きました。トイピアノでも全曲演奏しましたし、鍵盤ハーモニカの多重録音でもやったんです。鍵盤ハーモニカも、何台も用意したら、パイプ

オルガンと同じことができるよね？……と思い付いたのは良かったんですけど、多重録音なので、1曲を何回も録らないといけない。編集や録り直しもあります。それを32曲でしょ？まったくもってやんなきゃよかった！（笑）でも、「ケンバニスト」を名乗るなら「ケンバニスト」と呼ばれる人にしかできないことをやるべきだと言ってくくださる方もいるので、いろんなことに挑戦しています。

——「ケンバニスト」という名称には、どんな思いを込めていらっしゃるのでしょうか？

塚谷：楽器との出会いを大切にしたいと思っていて、それぞれの鍵盤楽器の魅力をどうしたら引き出せるのかを、いつも考えています。そうしているうちに、教科書どおりの弾き方だけでなく、トイピアノを何台も組み合わせて弾いたり、

パイプオルガンを弾きながら鍵盤ハーモニカを吹いたりするようになって、そういう取り組み方が、「ピアニスト」や「オルガニスト」というよりは、「ケンバニスト」らしいと言えるかもしれないですね。

——塚谷さんがトイピアノを弾くようになったきっかけは何だったのでしょうか？

塚谷：私は17年間オランダにいたこともあって、日本でコンサートをするとき、日本には自分の練習用の楽器がなかったんです。あるときまたま手元にトイピアノが2台あったので、パイプオルガンを弾くようにトイピアノを弾いてみたら、とても弾きやすかったんです。

——トイピアノとパイプオルガンでは、同じ鍵盤楽器でも全然違うように思いますが？

塚谷：オルガンで使うバッハの時代の運指法が、トイピアノに合っていることに気が付いたんです。同じ運指でピアノを弾いても、オルガンにはオルガンの、ピアノにはピアノの奏法や演奏習慣があるので、うまくいかないんです。それから、トイピアノとオルガンでは、楽器によって鍵盤の深さ



や幅や長さがいろいろなところも似ていますね。とくに古いパイプオルガンは、同じ楽器のなかでも鍵盤の深さが違ったり、戻りの早さが違ったりしますし、音色にもいくつかの時代様式が混じっていたり、ときには調子の悪い音色があったりもするので、楽器に合わせて演奏を組み立てなくちゃいけない。本当に一期一会です。

古いトイピアノも、コンディションが悪かったり、弾いても出ない音があったり、とんでもない音痴だったりしますね。でも、ここの音痴な部分は使いたいとか、そういうことも考えるんですよ。幼稚園の先生が子どもたちの劇の配役を決めるじゃないですか。そういうキャスティングみたいなことをしている気がしますね。

——今回のコンサートのためには、チラシを作る前に水戸芸術館にいらしていただいて、ホールや楽器の響きを確認していただいて、プログラムを組んでいただきました。選曲にあたってお考えになったことなど、教えてくださいませんか？

塚谷：ハイドンの音楽時計のための作品で悩みましたね、どの楽器で弾こうかと。音楽時計というのは、時計仕掛けの自動演奏オルガンです。オルガニストとしてはやっぱりオルガンで弾こうか、それともトイピアノでこの曲集を録音したし、トイピアノで弾こうか、と迷ったんですけど、水戸芸術館のチェンバロ（アトリエ・フォン・ナーゲル社製）が素敵だったので、あえてチェンバロで弾くことに決めました。

——ポジティブオルガンで弾く曲にも、悩まれていた印象がありました。
塚谷：水戸芸術館のポジティブオル

ガン（K. シュッケ社製）は、ポジティブ（可動式）といっても、何種類も音色が使える豪華な楽器です。けれど音色を使いすぎると、軽自動車エンジン全開で走るような、無理のある音になっちゃうんです。この楽器の華やかな音色を聴

かせたいけれど、どのくらいの華やかさがいいのかで悩みました。〈演奏会用ボレロ〉という曲は、小さなオルガンでも弾けるように作られていて、小さな寺院の奏楽で使われたであろう曲なんです。お祈りの場でボレロ？って驚いちゃうんですけどね。作曲したルフェビュール＝ヴェリーは、パリで有名なマドレーヌ寺院の正オルガニストを務めた、パイプオルガンのスペシャリストでした。ちなみに彼の後任がサン＝サーンス。その後にはデュボワやフォーレが続きます。そういった音楽家と肩を並べる存在でした。

——ほかに注目していただきたい曲はありますか？

塚谷：もうすぐ90歳を迎える現代ウクライナの作曲家のシルヴェストロフをコンサートの最初に弾くのは、ある意味では冒険ですけど、やりたいことでもありました。私はシルヴェストロフのCDも出していて、作曲家と連絡をとるようになって、収録曲の1曲は私に献呈してくださいました。ウクライナ情勢はいつまで経っても悩ましい状況です。改めてウクライナのことを思いながら音楽を奏でる時間が作りたい、という思いで選びました。



——最後にお客様へのメッセージをお願いします。

塚谷：水戸芸術館には素敵な鍵盤楽器が沢山あって、ワクワクしています。しかも私のトイピアノもステージに置かせていただいて、皆様に音楽を届けられること、とても嬉しく思っています。この楽器たちを楽しんでもらうために、何度も聴きたいなと思っていただけるような名曲を集めました。お気に入りの曲を探しに、どうぞお出かけください。会場でお目にかかりましょう！

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック
塚谷水無子(鍵盤楽器)
“ケンパニスト”のおもちゃ箱

2026.9.12(木)

13:00開場 13:30開演

(終演予定14:30頃)

※開場時にエントランスホールにてパイプオルガン演奏あり

全席指定 ¥1,500

(カップオン サザススペシャルブレンド1枚付き)

●出演

塚谷水無子(鍵盤楽器)

●曲目

バガテル 第1番 作品1の1(シルヴェストロフ)
ミュゼット BWV Anh. 126(J. S. バッハ)
《音楽時計のための作品集》より(ハイドン)
エリーゼのために WoO 59(ベートーヴェン)
小フーガ ト短調 BWV 578(J. S. バッハ)
演奏会用ボレロ 作品166(ルフェビュール＝
ヴェリー)
ほか

INFORMATION

※以下は8月1日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

（9.26（土）発売予定）

■庄司紗矢香（ヴァイオリン）＆鈴木優人（チェンバロ）

2027.1.24（日）15:00

9月・10月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆講座 片山館長と「めぐる」シリーズ

～武満徹没後30年記念企画～

9.5（土）14:00

料金[全席自由]¥1,000

◆ちょっとお昼にクラシック 塚谷水無子（鍵盤楽器）

9.12（土）13:30

料金[全席指定]¥1,500（カップオン サザススペシャルブレンド1枚付き）

◆武満徹の肖像 ～武満徹没後30年記念企画～

9.26（土）16:00

料金[全席指定]一般¥4,500/U-25（25歳以下）¥1,500

※「今昔雅楽集 四、秋庭歌一具」（10.4）とのセット券¥7,000

◆今昔雅楽集 四、秋庭歌一具 ～武満徹没後30年記念企画～

10.4（日）16:00

料金[全席指定]一般¥4,500/U-25（25歳以下）¥1,500

※「武満徹の肖像」（9.26）とのセット券¥7,000

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート

（入場無料／事前予約不要）

□9.19（土）12:00～12:30/13:30～14:00 尾崎麻衣子

□9.23（水・祝）12:00～12:30/13:30～14:00 安達柚季

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30～8:00

パーソナリティ：石井哲也アナウンサー

出演：音楽部門学芸員（月替わり）

学芸員がおおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▶Lucky FM ウェブサイト <https://lucky-ibaraki.com/>

▶radiko（ラジコ）でも聴きいただけます <https://radiko.jp/>



好評
放送中!

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆伝統芸能のススメ【狂言】

萬狂言 水戸公演

9.13（日）14:00

[出演]野村萬、野村万蔵、野村万之丞、

野村拳之介、野村真之介、石井康太

[上演演目]狂言「柿山伏」、「舟ふな」、「三本柱」

※ブレ・パフォーマンス・トークあり

料金[全席指定]

S席¥4,500/A席¥4,000/B席¥3,500

※お得な割引チケットもあります。詳しくは当館Webサイト（ACM劇場）をご確認ください。



現代美術ギャラリー

◆竹村 京 うごくせかい

7.25（土）～10.12（月・祝）

[休館日]月曜日（ただし、9.21、

10.12は開館）

[開場時間] 10:00～18:00（入場は17:30まで）

[入場料] 一般¥900/団体（20名以上）¥700

※高校生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料



水戸室内管弦楽団（MCO）メンバーが講師を務める2種類のレッスンにつきまして受講者・受講団体を募集します。

詳しくは当館ウェブサイトをご覧ください。

◆管打楽器アンサンブル・レッスン◆

オリエンテーション：2026年10月25日（日）予定

事前レッスン（非公開）：2026年10月～2027年2月の間で計5時間程度

コンサートリハーサル：2027年2月20日（土） コンサート本番：2月21日（日）

【会場】水戸芸術館コンサートホールATM

【対象】①グループ応募：高校生（中高一貫校の場合は中学生を含む）以上の木管楽器、金管楽器または打楽器、三重奏～八重奏程度のグループ②個人応募：高校生以上のフルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットの奏者。応募者のなかで選考し、アンサンブルを組んでいただきます。

【募集枠】1組3～8人程度・計4組程度

【申込一次締切】2026年8月24日（月）必着 【二次締切（グループ応募のみ）】10月5日（月）必着

◆吹奏楽団のための公開レッスン◆

会場：ザ・ヒロサワ・シティ会館大ホール

事前レッスン（非公開）：2027年1月30日（土）

リハーサルと公開レッスン：1月31日（日）

【会場】ザ・ヒロサワ・シティ会館大ホール

【対象】茨城県央地域で活動する高等学校（中高一貫校を含む）、大学、職場・一般の吹奏楽団

【募集枠】1組程度

【申込締切】2026年9月23日（水・祝）必着

2026年8月7日発行（第278号）

編集：水戸芸術館音楽部門 | 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳、渡辺有美

発行：（公財）水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118（音楽部門）

Tel.029-231-8000（チケット予約センター 9:30～18:00・月曜休館） <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン：K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本：山三印刷株式会社



■編集後記

一口で食べられる水ようかん。プレーンのほか抹茶や黒糖など、いろいろな味の水ようかんが縦に細長いバウチで個包装されていて、手軽に食べられる上にとっても美味。ただどうしても、食べている最中にとある曲が脳内を駆け巡ってしまう。ちゅーる、ちゅーる……（角）

8年前、伶楽舎の方々と初めての打ち合わせで、コンサートホールATMの図面をお見せしたところ、「私たちには「秋庭歌一具」を上演するためのホールとしか見えません!」とのお言葉をいただきました。あの日の一言が、今秋ついに実現します。楽しみでなりません。（篠）

県内の道の駅全制覇をねらってドライブしています。先日訪れた常陸大宮「かわプラザ」は北に久慈川をのぞむ見晴らしのいい高台にあり、テラスに出て昼飯を頬張りながら、川をはさんで陣を布き、両軍にらみ合いの戦国武将のような気分も味わいました。（て）

健康診断の時期がきました。昨年は体重がすごく減っていて喜んでいましたが、見事にリバウンドしています。というわけで、今年は食欲の秋ではなく、芸術の秋を楽しみます! もちろん運動と食生活も見直して、健康第一で秋を満喫したいです。（春）

先日、「カルテット AT 水戸」の公演が無事に終了しました。アウトリーチで伺った2校の児童・生徒さんが、演奏を楽しんでくださる姿が印象的でした。この体験が、これからの人生の中でふとしたときに思い出される、温かな記憶となれば幸いです。（視）

陶芸（ろくろ）体験に行きました。作りたいものとか、その作品で何をしたいのか（このお皿で餃子が食べたい! など）をしっかりとイメージして、目の前の土だけに集中する時間は、心が整う感じがして素敵な時間でした。芸に触れる時間は幸せですね。（ひ）